

## 平成 22 年度環境科学センター研究推進委員会課題評価結果

### 2 水源環境の保全に関する研究

- テーマ 1 ダム湖集水域における高度処理型浄化槽整備の効果検証
- テーマ 2 水源河川における生物多様性の解明
- テーマ 3 大気環境に係る丹沢ブナ林の保全に関する研究

#### [総合評価とコメント]

- 水源環境の問題は、県民の健康影響に直結しうるものであることから、特に県民の関心の高い課題といえる。

神奈川県内のダム湖のうち、特に相模湖と津久井湖は上流域の人口が多いことから、その対策の重要性が高いが、種々の対策技術効果の評価はこれまで十分になされておらず、実用面での有用性の高い研究といえる。

生物調査を中心に、所外の研究者と共同で行う部分が研究全体のかなりの割合を占めているが、それがセンターの今後の研究活動に活かされるためには、ノウハウがセンターに残るような形での共同研究が必要といえる。現在もそういうことを意識して取り組まれていると思われるが、さらにその意識を高めて取り組まれることを期待したい。

水源森林の衰退とオゾンストレスの関係は、注目されて久しいにもかかわらず未解明の点が多い課題であり、センターの独自性を発揮しうるテーマなので、より積極的に取り組まれることが期待される。

目標がかなり高いレベルであるために、進捗度に若干心配な点があるので、目標の絞り込みなど、現実的な目標設定となるように配慮されたい。

- 水源環境の保全は、自然と調和しながら健康な生活を送るために不可欠であり、重点的に取り組むべき課題である。

テーマ 1 は、水質汚濁が進んでいるダム湖の水質改善策としての高度処理型浄化槽整備の効果を明らかにすることを狙ったものである。これは、過去の施策の効果を評価し今後の施策につながるという点で評価できる研究である。なお、研究側の責任ではないが、高度処理型浄化槽の普及自体が停滞しているので施策の推進が必要と考えられる。

テーマ 2 は、県内河川を対象に、指標生物を利用したモニタリング手法の策定を狙っている。県民参加の視点を加えている点は特に評価できる部分である。平成 24 年度からの河川モニタリング調査につながるよう平成 23 年度における本研究の進展が期待される。

テーマ 3 は、外部研究機関と連携しつつブナ衰退と大気汚染との関係究明を目指している。神奈川県の高貴な自然資源であるブナ林の保全再生は水源保全の観点からも重要であり、この研究の成果が活用されることを期待する。

- テーマ 1 の研究の意図はわかるが、結果として、浄化槽の普及率が低い地域を対象にした調査になったのは、惜まれる。「計画の妥当性」という点で、改善が必要である。結果として、進捗状況という点でも、有意義な知見を得る時期が、遅れたのではないか。

テーマ 2 の河川のモニタリング調査については、県民参加の実際の人数という実績データがほしい。県民参加については、継続的なパートナー住民（あるいは市民）組織を見いだし、連携していくべきである。県民参加を環境学習と結びつけることが必要であろう。

- テーマ 1 は、高度処理型の浄化槽の性能評価をすることは大事であるが、普及が進まない状況下で現在の研究の進め方でよいのかを再検討すべき。

テーマ 2 は、県民参加型の調査は市民の環境意識を高めるなどの点でも意義があるが、得られるデータの質などに注意が必要だろう。継続していくことにも意義があるが、データをいかにとりまとめるか、あるいは、研究目的の指標生物の選定についてはいかに新しい観点を産み出していくのか、など研究として戦略の明確化が必要。

テーマ 3 は、難しい対象への取組であり、今しばらく進捗を見守りたい。

全体として、テーマ 1 とテーマ 2 については、研究を進める戦略の明確化が必要。

○ センターが実施すべき重要なテーマですが、アプローチの方法については、成果の評価をいくつか、適宜見直す必要があると思われます。

テーマ1は、統計的に信頼ができるサンプル数が得られる地域の選択が課題と思われます。

テーマ2は、水環境の保全に対する県民の関心を維持するため、県民参加の調査を継続することは有効で、センターの取り組むべきテーマであると思います。

テーマ3では、ブナ林の衰退要因としてのオゾンの作用機構を遺伝子レベルで解明することができれば、今後の研究に大きく貢献すると思われますが、かなり難度の高い研究テーマでもあります。専門家との情報交換の仕組みを作ることが必要と思われます。

○ 水源資源の恒久的確保は神奈川県環境政策の根幹の一つと云うる。個別課題としての合併処理浄化層の設置推進は、水源環境保全対策の一つとして肝要と考えられる。その効果を実験的に調査することの行政的意義は大きい。ダム湖の水質には複合的な要因が影響していると見込まれるが、解明の手掛かりとなりうる研究と位置付けられる。

県民参加を得ながら、生物多様性を水源県境において究明する研究は重要なものである。

ブナ林の保全は、これまでも継続的に検討されてきた重要課題の一つである。従来蓄積を活用しながら多方面からの情報を集約して、解明の深化をはかることを期待したい。

**(数値的評価)**

★評価者6名

〈評価の内容〉	〈評価項目〉	〈ランク〉									
課題設定の妥当性	○背景と必要性	5	(3人)	4	(2人)	3	(1人)	2	(0人)	1	(0人)
	○優先性	5	(3人)	4	(2人)	3	(1人)	2	(0人)	1	(0人)
計画の立案と実施方法	○研究内容	5	(2人)	4	(2人)	3	(2人)	2	(0人)	1	(0人)
	○計画の妥当性	5	(0人)	4	(3人)	3	(2人)	2	(1人)	1	(0人)
研究の進捗状況	○進捗状況	5	(0人)	4	(4人)	3	(1人)	2	(1人)	1	(0人)

※ランクは、5点満点の評価で5（優）～1（劣）